西山上人の佛教觀

安井廣度

一

西山上人は聖淨の二門を對釋して、前者を自力斷證、此土成佛、教行證の難行道、後者を他力出離、彼土往生、教願證の易行道とし(秘決集第十四、I. 318等)、淨土門を以て時機相應の要法としてゐる(散目第四、III. 375)。それで、此等の對目文を見てゐると、聖淨の二門は實修の上に難易の別があるにしても共に成佛の道となすが如く、但だ機の不堪に約して淨土門を勸めたものゝやうに考へられる。しかし、それは從來の門内の教判を祖述するうへから單にそう對釋した文のものであつて、彼の眞意は進んで淨土門が唯有一乘の法なる旨を明にせんとするに在つたのである。斯くて、彼は諸經を『觀經』におさめ、天台の教判を參考して、一念義の幸西のやうに聖道門を淨土門に入るべき權假方便の道とし、更に深く聖道門(諸經)を淨土門(觀經)に融會したのである。

二

聖道門の無得道を說く二三の文を出すと次のやうである。云く。

淨土宗は娑婆を廢して淨土を立つるが故に、觀を立て、行を立て、慈悲を立て、果を立て、識を立て、味を立て、家を立つ。聖道教は娑婆を立てゝ淨土を知らざるが故に、聞を立て、願に留り、智慧を立て、因に留り、心に留る、

味なく、家なし。此の二教甚だ以て相違す(秘決集第一、I.1)。

釋迦一代の教は永く眞實なく皆な方便と爲す、而して出離生死成佛得果なからしむ、偏に他力來迎を以て生死を離れしむるを釋迦教の利益と爲す、報身の頂に九方西方を現じて極樂を選取するを釋迦教の勝益と爲す、亦二なき也、故に釋迦教は皆な是れ別時意也、應に知るべし(同第四、I.94)。

佛果を得がたしとは、智惠よりは萬行眞實なれば百大劫を送りて成佛すと云ふ。劫永く盡きざれば又成佛あるべからず、其益の成ぜざるを知らしめん爲に劫を以て之を教へ給ふ(同第十七、I,383)。

この中、初の文は彼れ特有の用語を以て聖道門を無得道の教とし、次の文は幸西と同じく之を別時意の方便說とし、後の文は聖道門の三祇成佛說を捉へて、成佛に多劫長時の修行を要するは結局成佛の不可能なことを示すものとしたのであつて、かうした意味は至る所に見られるのである。然らば、釋尊は何の必要があつて聖道の諸教を說かれたのであるかといふと、それは畢竟淨土門に入らしめんがための調機弄引の意に外ないのであつて、彼は次のやうに之を述べてゐる。云く。

一實の機とは濁世の凡夫是也、濁世の凡夫直に佛に遇ひ奉りて法を聞くべき謂れなし、本意に非ざる故に樂欲の不同に任せて五乘の法を說かんと思はず、密意に任せて一實の法を說きて濁世の凡夫を度せんとすれば其の機あり難し、此故に假りに五乘の機を設けて、先づ五乘の法を說きて漸く法雨を三界に降し、機を調しらへ、一實の法を說かんと思して、聲聞菩薩の五乘の權機を俱ひて、彼に對して五乘の法を說けば、教の如く修行して三乘五乘の益を得るを在世に之を見、滅後に之を聞くに、佛說の眞實なることを信ず可けんは、一實の法を說きて凡夫度すべきの

謂れ五乘の用に依りて成ずべしといふ意也(玄自第二、III. 30)。

方便眞實とは、菩薩六度萬行を修して娑婆に於て成佛するは皆是れ方便の說也、其故は穢土に於て六度萬行を修することを敎ゆる事は成佛なしと雖も、成佛は得がたきことを敎へ知らしめんがために三僧祇百大劫を送りて成佛すと說く、是れ則ち方便善巧也、今難易の敎を造るに、娑婆の成佛難き故に穢土を厭離すべし、極樂の成佛は易きが故に淨土を欣求すべきの方便を示す也、是を方便眞實といふ(秘決集第十七、I. 384)。

一には日觀……聖道敎は娑婆より外には淨土を造らざれば、之を極めて日を以て慈悲の極と爲し佛と爲す、此れ法相の有に留る法門也。二には水觀、日は娑婆に極むるも是れ猶窮らず、娑婆の外に淨土あり、然り而して淨土の悟といふも娑婆の智慧の外になし、眞假一同なる故に淨土を娑婆の智に等せしめて、娑婆の智水の外にあらずとす、是れ三論の無相也。三には地觀、水において猶娑婆の假に等せしむるは爾らずして、淨土は娑婆の外の唯眞也、是れ佛法の至極也、是れ華嚴經の宗、大乘の法門にして卽ち他方の淨土を立つ、四には寶樹觀、地觀に至つて唯眞の淨土を立つと雖も、未だ因果の位を辨へず、今七重を作つて、唯眞に於て因果を立つ、是れ佛法の至極也、是れ天台宗也。五には寶池觀、先に因果を立つと雖も未だ佛體を造らず、今智慧の佛を造りて觀佛と爲し、慈悲の佛を造りて念佛となす、是れ佛法の至極と爲す、是れ則ち眞言兩界の法門の位也。六には惣觀、先に娑婆に極め(法相)、淨穢を等し(三論)、唯眞を立て、娑婆を捨て(華嚴)、因果を作り(天台)、佛體を造り(眞言)、重を顯はすを面々の悟と爲すと雖も、是れ猶片の法門也、佛法の至極には非ず。本より佛法は淨穢因果大小差別し、一片にあらざるありと雖も、覺れば卽ち本有常住なり。譬へば、一丈二丈の圓木を尖くに造らんと欲するに、先づ方に作りて後に圓になす

が如し。諸法の性は理に歸することを覺らむが爲にその差別を顯はして、本有常住なることを知るも、是れ則ち萬法の空なる體、名に歸する故也、然れば則ち智慧の及ぶ所は第六重に至りて卽ち盡きぬ、此の上には心の覺りなく、その覺り極れば必ず佛の慈悲に至る(曼註第一、II. 22)。

佛法の始終を覺りて其の法門を極めば六重あるを出でず、此の六重は法爾として之あり、然るに菓を覺らざる重の聖道は六重あることを覺らざる也、然れば則ち菓を見る者は六重を經て之を得ることを知るべし、菓を知らざる者は六重を知るべからず、其の六重とは根莖枝條葉華菓也、小乘を根と爲す、法相を莖と爲す、三論を枝と爲す、華嚴を條と爲す、法華を葉と爲す、眞言を華と爲す、念佛を菓と爲す。問曰、和尙在世の時は顯大權大のみありて實大密大なし、豈此の六重を造らんや。答曰、先に述ぶるが如く佛法に本より六重、法爾として重々ありと雖も、聖道敎は葉に留り華に留る故に未だ此重を知らずして此難あり、菓を觀ずる者は必ず根莖を經て之れありと知るべし、實大密大は全く今案に非ざる故に、今菓の宗を立つる故に、悉く此の六重を覺る也(同第七、II. 114)。

之に依ると、聖道の諸敎は釋尊が淨土からつれて來られた所の權機に對して說かれた所のものであつて、釋尊が斯く權機に對して之を說かれたのは、依て以て佛說の信用を高め、我々凡夫をして聖道の難成を知つて淨土門に入らしめんとの調機弄引に外なく、その說く所も念佛の菓に至るまでの根莖枝條葉華に比すべき半途の敎とするのである。殊に、後の二文に於て六宗を入信の六階段とし、夫等の敎に依て、聖道から淨土へ、理から事へ、名から體へと、つぎ〳〵に宗敎的(淨土門的)に敎養されて行く跡を示したのは、調機弄引に聖道の難成を知らしめる意味ばかりでなしに、反面之を淨土の機に調へて行く意味のあることを示すのであつて、興味の深いものがある。されば、その所謂聖

淨二門は、從來解されたやうに、成佛に到る二つの道とすべきではなく、粗より妙へ、方便より眞實へと進む求道の次第を示したものであつて、聖道から淨土へと竪に並べて見るべきものだといふのである。

三

さて斯く聖道門が淨土門へ入るべき調機の敎とすれば、聖道の諸經に淨土門の意の存するは勿論、進んで、之を淨土門の經典ともなすことを得べく、彼は遂に聖道門を淨土門に融會し、粗卽妙と開會して一乘の義を成じたのである。蓋し之を『觀經』に約していふと、聖道の諸經は韋提の請に應じて說かれたものであるから、行門の形を以て說かれてゐるのである。しかし、能說の佛意を顧みると、それは觀門以外のものではないのであつて、行門の形を以てその請に應じた所に調機の用意を存し、しかも、そこに弘願を觀照する意味ありとするのである。云く。

聖道淨土の差別は迷情の機の前に極むる暫くの法門なり、佛意實義の前には悲智の分別あるべからず（曼陀羅八講論議鈔、II. 379）。

彼の意をむかへていふと、此文の意味は、迷情の機を對手とするから、諸佛は慈悲を智慧に收め、通三身門の智慧から聖道の諸經を說いて、その機を調へ、彌陀は智慧を慈悲に收め、三身門土の別報身の慈悲から獨り來迎を垂れて往生出離せしめ給ふのである（密要決第一、II. 196, 第四、II. 262）。しかし、佛意實義の前には悲智の分別はないのであるから、聖淨の二門は暫くの法門であつて、實は唯だ一色に淨土の慈悲を顯はすといふのであらう。そこで彼はかういつてゐる。云く。

聖道敎を智慧といふ、淨土宗を慈悲といふ、聖道敎は智慧、皆名に留りて方便也、淨土敎は慈悲、名の體に就きて

眞實也。故に、聖道教は淨土宗に就きて眼を入れしむる也、故に、觀經一卷に依て、諸經の卷數を之に納む（秘決集第十七、I. 384）。

淨土の宗義は永く諸經の廢立に異る、諸經觀經一同して衆べて他宗を非ることなし（同第三、I. 48）。

出離生死一代の說教、宗々已に之を證明して之を爭ふ、然りと雖、皆諸經に極樂往生の利益を取りて面々の已證と爲せり、彌陀より外に出離生死の路なし、之に就きて十の證據あり、……（修業要決、II. 348）。

一代八萬の教は只此念佛の一法を以てす、顯宗權宗實宗密宗教外別傳、皆此の念佛を以て宗々の至極とするを大乘の意義に合すと云ふ、意義とは一代の佛法は一同にして、義とは此の念佛を顯はさんと欲する也（秘決集第十七、I. 377）。

一代八宗九宗は皆淨土所立の法門の一行也、全く外より立つる所に非ず（密要決第一、II. 194）。

この中、第一文は暫く聖淨相對して聖道を方便、淨土を眞實としつゝ、淨土の『觀經』を以て聖道の諸經を開眼すべき旨を示し、第二文は淨土の廢立は永く諸經の廢立とは意味を異にするのであつて、諸經を開眼すれば、諸經と『觀經』とは眞假一同して、衆べて他宗を謗ることなしとし、第三第四の兩文は、諸經諸宗の體を押へて但念佛とし、第六文は、諸宗の教行は淨土所立の法門に外ないことを注意したのである。

然らば、聖道の諸經に如何に淨土の教があらはれてゐるかといふと、聖道教は『觀經』の定散に外ならないから、ここに觀門の謂れが窺はれるのであつて、『散自』第二（III. 326）に「觀門廣ければ弘願彌〻成ず」といふは、よくその感味をあらはしてゐる。卽ち、諸經を以て行門の教と解するは佛意を知らざるものゝことであつて、たま〳〵行門の形を以

て之を說かれたのは、前述のやうに、我々の機を調へて弘願に入れしめん微意に外なく、進んでいふと、諸經の定善は彌陀の依正を能詮し、諸經の散善は彌陀の利生を能顯するといふのである。まことに諸經は弘願をあらはす能譬であつて、心あるものは諸經の片言隻句にも彌陀の願意を味ふべく、「法華八軸は廣の念佛」といふも此意を述懷したものである。更に彼の所謂行成門からすると、聖道の修行は皆悉く念佛體內の功德であつて、「彌陀を憑む心深く成りぬれば、彌陀所有の功德を學び顯はすこと、淨土に生れて爲すべきことを且つ〳〵穢土にても習ひ修めて、惡をば退き善には進む心を遣りて、一善を修し一惡をも止めて淨土に生れんと廻向すべきであつて（定自第一、III. 208）、之を念佛行者の正行增進の姿とするのである。卽ち、能詮觀門の謂れからすれば、聖道の諸經は涅槃の一路を示す大悲の指導錄であり、又行成の法門を以てすれば、それは信仰の白道を歩むものゝ軌範錄であつて、かうして淨土門の外に聖道門なく、法界唯念佛の一法なりとするのである。

要之、彼は「聖道と淨土を一機に持つて出離す」るものと定判するのであつて（三部經論議）、聖淨相對する時は、聖道を調機の方便として之より淨土門に入り、聖道を淨土へ融會する時は、一代佛敎は、更に廣くいふと、法界は、弘願念佛の一大曼陀羅であつて、觀門、弘願、行成の義を顯はすものと解するのである。

四

然るに、こゝに一二疑問のあるは、若し聖道門を無得道の敎として自力の成佛を否定すると、數多き經典の中に之を說くことが凡て妄誕となつて、如何にも不自然ではないか。又、垢障の凡夫は暫く除いて、自力から進まれたといはれる大小の聖人や諸佛は、そも〳〵如何にして得道されたのであらうか。又更に進んで彌陀の成道はそも〳〵如何

に解すべきかといふ、さういふ疑問が生ずるのである。

先づ第一の疑問に對して、彼はかう答へてゐる。云く。

明華開已後得益有異等云事。問曰、此は一向正行歟。答曰、爾り、此は第六受法の果なり。之に依て一切大小乘に說く所の大小の得果は皆是れ第十一門の益也、此位を聖道教とは云ふ也。十一門の位にて長遠と云ふも速疾と云ふも皆彌陀の功德にして長にして短也、短にして長也、仍て長短は唯一也、三僧祇劫も一念に經んと欲すれば卽ち一念に經、一念を無數劫に延さんと欲すれば卽ち亦之を延ぶ、此の如く意得れば聖人の修行を以て難と爲さん。爾るに、凡夫の位を以て此行を行じて往生を求む、此を雜毒虛假の行と嫌ふ也。顯行の者は第六の受法を以て第十一の得益に屬せんと欲するが故に其行成じ難し。大乘起信論に曰く、菩薩の修行は超越の行なく、必ず三祇を經云々（大乘起信已下至三云々異本無。）仍て或は魔界に墮し、或は三惡道に落つる也。仍て凡夫は必ず第九の來迎を經て出離を成ず、是を淨土教と云ふ也（散他上、V. 117）（同下、V. 185 參照）。

之に依ると、彼は聖道の諸教を以て彼岸（華開已後）の教とし、しかも、之を此岸の教と解する所に錯の根源を見たのであつて、此點また幸西と意を同じくするのである。換言すると、前引の文にも出てゐたやうに、釋尊が聖道の諸教を說かれたのは、佛說の信用を高めんがために、且く權機のために說かれた所のものであつて、之を我々實機（凡夫）のための教と解し、機の三業を募るが如きは、佛意を誤るものだといふのである。卽ち、聖道の諸經は華開已後十一門の利益であつて、是を屢〻權機に對して說かれたのは諸機誘引等のためだといふのである。

第二の疑問に就ては、かういつてゐる。云く。

今經の意にては大小乘の聖人は皆是れ華開已後の人也、衆生利益の爲に娑婆に來りたまへり(玄他卷中、IV.321)。

其引聖勵凡等とは、三世諸佛淨業正因といふは、過去の諸佛現在の諸佛の正覺を成じたまふは、三福業(念佛)を往生の正因と習ふて、凡位より往生を遂げて佛に成りて、還りて衆生の爲に此法を說けば、汝等凡夫の未來の佛にて在るも、此の謂れより成ずべしといふ意なれば、過現の聖を引きて、我等の凡を勵ますと意得べきなりと釋し成ずる也(序自第四、III. 192)。

今家の意、大小乘の聖人は皆是れ華開已後の聖人也、更に生ずべからず、故に生と不生を論ずべからず。凡そ今經の本意は垢障の凡夫を以て正機として十六觀法を說きたまふ故に、大小乘の生と不生とを論ずることなし、設ひ聖人なりと雖も、此の本願所成の土に向ふ時は、凡夫に同じて往生すと云ふ也、……大經の十四佛國の諸菩薩皆往生すといふは……今經(觀經)にて意得れば正因の上の正行の謂れを顯はす也(玄他卷下、IV. 326)。

この中、前の文は大小乘の聖人を以てすべて權機とし、そうした人も初めは彌陀の本願に依て凡位から往生を遂げ給ふたものとし、後の文は暫らくそれを菩薩としても、正因門からすると、すべて本願の上へは自力の修因を以て生れ難いから、そうした菩薩も凡夫に同じ、凡夫と同じく他力から出離するのであつて、十四佛國の菩薩の行業が我々平凡夫よりも立派であるのは、正因のうへの正行相なりと解するのである。

さて、かやうに一切の諸佛も菩薩も皆彌陀の念佛三昧に依て往生成佛されたものとすると、彌陀自らは抑も如何にして成道し給ふたのであらうか、之に就て、彼はかういつてゐる。云く。

法藏比丘、昔蓮華を以て本願の義を顯はす、彌陀の正覺を成るを以て蓮華始めて現はるゝ所也、三世諸佛この彌陀

の始めて正覺を成るの花に坐るは、諸佛の正覺は彌陀に從て成りたまふ故也(曼註第六、II. 92)。

今の廻向は又則ち觀門を指して之を名く、謂く、行門の功德は悉く彌陀の功德なりと知るは、因を果に廻す廻向の義也、法藏菩薩のみ行門成じて佛と成りたまふ故也、此は行門を捨てゝ觀門に入るが故に自行の廻向也、又、觀門より行門に出づると知れば、觀門に依て行門あり、此の行門は化他の功德なれば、觀門卽行門を成ずと知るは、自行を他に廻する廻向の義也(玄自第四、III. 91)。

之に依ると、彼は彌陀一佛を行門成の佛とし、又彌陀を本師本佛として、他の諸佛は觀門から弘願に入つて成佛し給へるものとなすのである。しかも、こゝでは必ずしも彌陀と諸佛の前後を議する必要はなく、彌陀に依て眞の宗教的客體が現れたのであるから、後佛はもとより前佛も皆彌陀の正覺華に坐して成佛するものとするのである。然るに、此に一つ疑問の生ずるは、何故に彌陀獨り行成就して、他の何れもが行成ぜないのであらうか。換言すると、彌陀の行成は衆生の行成を證し、衆生の不成は彌陀の不成を意味しはせないかといふことである。しかし、そこまで押しつめると、彌陀の行成といふは常にいふ所の行成のやうに、行成に始めのある行成ではなくして、無始の行成と考へらるゝに至るのである。無始の行成は本來の行成である、本より行成就する佛といふ意味である。『觀經疏大意』に云く。

問うて曰はく、若し三世諸佛の成佛は彌陀に依るといはゞ、何故ぞ經に十劫成佛と云ふや、故に十劫以前の衆生は必ず彌陀の力に依らずと聞えたり、況や彌陀は卽ち五十三佛に依りて成佛すと見えたり、如何。

答へて曰く、此の如きの說明は併しながら觀門の說なり。無始性德の理の中には正しく凡夫を度する事之れありて

阿彌陀と名く。然るを理性の故に、此の功德は凡夫聖人の心中に皆遍滿す、此れを卽ち佛性といふは是れなり。然るに、此の理ある時には凡夫は知らざるが故に覺らず、此れを智を以て覺りて、凡夫の爲に事相に顯はす時に阿彌陀と云ふて、指方立相の西方に佛有るぞと云ふなり。故に生死を離るゝ事は事に依らずんば何ぞ然らんや、然るを事に顯はすとは願に依つて衆生を攝取するなり、故に願を發す佛と號くる故に必ず始有りと云ふなり、此の如く始成正覺の相を機のために說く故に十劫とも云ひ十八劫とも云ふなり、此所說は皆觀門の說相なり。弘願の方よりして卽ち之れを云はゞ、一切成道の劫數は幾くと云ふ事を定む可からざる歟」

弘願の彌陀の「劫數は幾くといふ事を定むべからざる歟」といへるは、無始の行成、本來の行成といふ意味ではなからうか。斯くて、彼は十劫の彌陀を以て觀門の彌陀とし、弘願の彌陀を以て無始の性德、無始本有の極理としたのである。されど、性德とか極理とかいふと、兎角、抽象的な非人格的な、冷たい單なる理と見られやすいから、彼はこゝを注意して「凡夫を度する事なる」理としたのであつて、それは具體的な人格的な凡夫を度する理だといふのである。卽ち、彼の彌陀は、事かと思へば理なる事であり、理かと思へば事なる理である。換言すると、聖道的な但理の彌陀と、鎭西的な但事の彌陀を止揚したる、もう一つ高次的な事であり理でもある彌陀としたのである。

要之、聖淨相對する時は、聖道門を以て淨土門に入らしむる所の權假方便の敎とし、聖淨融會とする時は、法界唯淨土の一門あるのみとするのであつて、その何れよりしても、聖道門を以て無得道の敎とする者は、阿彌陀如來を無始行成の佛、卽ち無始本有の極理とするものゝ如く、幸西の本迹二門說にも、隆寬が「無始本有の依正」云々といつてゐるのにも、その意が見られるのである。但し、西山門下の說は必ずしも一樣ではないのであつて、私の見る所では

30

本山義の說が能く師說を傳へてゐるやうに思ふ。

附記　編輯子の督促急なるも多忙にして稿ならず、已むなく近日刊行すべき拙著『法然聖人門下の敎學』中の一篇を寄せて、その責を塞ぐ詫せよ。